

# NEWSLETTER No.26

2018. 6. 8.

## I 日独共同大学院プログラム (IGK)

### ▼プログラム概要

### ▼2018年度新規登録生の紹介 (東家友子)

## II 欧州研究プログラム (ESP)

### ▼プログラム概要

### ▼2017年度修了生一覧

### ▼2018年度新規登録生一覧

## III 博士論文奨学助成金 (ZSP)

### ▼プログラム概要

### ▼成果報告書 (赤池美紀)

## IV TLPボン・ウィンタースクール プログラム

### ▼プログラム概要

### ▼参加記 (野崎多実子・西野桃子)

## V 2017年度DESK活動記録一覧

## VI 関連出版物の紹介

### ▼『ヨーロッパ研究』第17号

## I 日独共同大学院プログラム (IGK)

### 【研究計画】

近代日本・中国における  
ドイツ社会派藝術の受容  
—魯迅のドイツ版画コレクションを手掛かりに—

地域文化研究専攻 博士課程  
(2018年度IGK新規登録生)  
東家 友子

本研究は、魯迅のドイツ版画・芸術書収集、普及活動に関わった人物を手がかりに、1920年代から30年代前半の日本と中国における、ドイツ社会派美術受容の一側面を明らかにすることを目的とする。

中国近代の著名な文学者、魯迅 (1881-1936) は、近代新興木版画運動の提唱者としても知られる。魯迅は中国の新しい芸術としての創作木版画に

注目し、木版画芸術普及の第一歩として、外国の美術書や版画作品を大量に購入し、紹介した。魯迅が外国版画の紹介を始めた1920年代末期は、左翼文化運動が国際的な広がりをみせた時代である。当時の左翼美術は、その他のジャンルにも見られるように、海外の理論やスタイル、作家や作品がまずは日本で紹介され、その後出版物や留学生を介して日本から中国へ伝播するという流れが一般的であり、魯迅も当初、日本で出版された書物を通して、ドイツ社会派美術への理解を深めた。

魯迅と美術の研究分野において、ドイツ美術に関するものは、魯迅とケーテ・コルヴィッツ、魯迅と表現主義など、個々のテーマやスタイルと魯迅との関係に限られたものが多く、魯迅のドイツ美術受容過程における日本の影響や、当時の社会的背景との関係について論じたものは少ない。しかし、ドイツ語を理解し、日本留学中に西洋美術に触れ、日本語文献を通じてマルクス主義芸術やドイツ社会派美術

への理解を深めた魯迅の美術観を理解する上で、多角的なアプローチは重要であると考えます。また、日中のドイツ近代美術受容を比較考察する上でも、新たな視座を提供できるものと考えます。

博士論文では、三部構成を予定している。第一部ではワイマール期ベルリンの芸術家と社会に焦点を当てる。ワイマール期ベルリンでは、ダダ、ノイエ・ザッハリヒカイトといった流れの中、従来の伝統を引き継ぎながらも社会的弱者に目を向けるケーテ・コルヴィッツは独自の光を放ち、彼女の周辺にはオットー・ナーゲル、カール・メッフェルト等、社会の情勢に関心を持つ芸術家が集まった。

第二部では、ベルリンの社会派芸術家の動向に注目していた東京の芸術家たちに焦点を当てる。1930年前後は、日本でプロレタリア美術運動が最も盛な時期にあたる。海外の左翼文芸・美術の紹介に大きな役割を果たした国際文化研究所のメンバーには、村山知義、千田是也など、ドイツ滞在経験のある人物が存在した。ここでは、国際文化研究所メンバーにより紹介された書籍や美術作品を中心に分析する。

第三部では、上海における魯迅とドイツ社会派美術との関わりについて論じる。当時、魯迅は近所にある内山書店から、多くの日本語書籍を購入していた。また、ドイツ留学中の若き友人徐詩荃から大量のドイツ語書籍を入手したほか、上海在住のドイツ人左翼コミュニティとの往来を通して、同時代のドイツ美術への理解を深めることができた。魯迅とドイツ美術について、日本からの影響や日本プロレタリア美術家との相違点などに着目しながら分析したい。

日独共同大学院プログラム(IGK)は、日本とドイツの双方の大学が協力して大学院博士課程の教育研究を共同で行い、プログラムに参加する学生が出身大学において博士号を取得することを支援するものです。2007年9月から2017年8月までの期間、東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学のあいだで集中的な学生・教員の相互派遣を行ないました。東京大学ではこの10年間にわたる成果と実績を受け継ぎ、同大学院総合文化研究科の博士課程教育プログラムとして設置された「日独共同大学院プログラム」科目を引き続き運営します。

今後はこの「日独共同大学院プログラム」を中心に、ドイツ・ヨーロッパ研究センターが提供する修士課程プログラム「欧州研究プログラム」とも連携しながら、ハレ大学をはじめとするドイツのパートナー大学（ギーセン、ボン、ベルリン、ケルン、デュッセルドルフ等）、ドイツ研究協会（DFG）、ドイツ学術交流会（DAAD）等との協力関係を深め、大学院共同教育を通じて、日独大学院における国際的な学術交流を促進し、若手研究者養成と国際共同研究の充実を目指します。このような大学院博士課程の共同教育を通じて、日独の大学院における組織的な学術の国際交流を促進し、博士課程における若手研究者の養成及び国際的な共同研究の充実を目指します。

## II

## 欧州研究プログラム（ESP）

欧州研究プログラム（European Studies Program ESP）は、EUを中心とした統合が進み、政治・経済・社会のあらゆる方面で既存の秩序が変容しつつある現代欧州について、最新の研究方法と正確な知識、それに基づく洞察力を養い、日欧の架け橋として社会の様々な方面で活躍する「市民的エリート」を養成するプログラムです。東京大学駒場キャンパスの大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構ドイツ・ヨーロッパ研究センターが、駒場キャンパスにある豊富な研究と教育のための人材を中心として、本郷キャンパスの教員の支援もおおぎながら、この教育プログラムの調整にあたります。

## 2017年度 修士課程プログラム修了生

| 氏名   | 所属                                 | 修士論文題目                                                 |
|------|------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 高井綾香 | 総合文化研究科 地域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | 「バロック都市」か「新しい都市」か<br>—東ドイツ社会主義体制下のドレスデンにおける戦後都市再建をめぐって |
| 福原優策 | 総合文化研究科 地域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | ウクライナ危機がエストニア・ロシア人の集合的アイデンティティに与えた影響                   |
| 李映里  | 総合文化研究科 地域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | ゴシック・リヴァイヴァルと都市空間の再キリスト教化<br>—19世紀パリにおける教会堂の破壊、修復、建設—  |

## 2018年度 修士課程プログラム新規登録生

| 氏名   | 所属                                 | 研究テーマ                             |
|------|------------------------------------|-----------------------------------|
| 石井萌加 | 総合文化研究科 超域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | ナチス期におけるブラームス受容                   |
| 寺本洋子 | 総合文化研究科 地域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | 戦後ドイツにおける反ナチ抵抗運動の記憶の受容            |
| 長谷桃子 | 総合文化研究科 地域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | ドイツの歴史教育<br>—グローバル化する社会における変容の必要性 |
| 峯沙智也 | 総合文化研究科 地域文化研究専攻<br>欧州研究プログラム（ESP） | ドイツ関税同盟（1834-1871）における領邦間統合プロセス   |

## III 博士論文奨学助成金 (ZSP)

ZSPは、社会科学の分野を中心とした、ドイツやドイツに関連する分野の博士論文を作成するための現地調査を支援するプログラムです。調査終了後、通常の査読プロセスを経て『ヨーロッパ研究』に論稿の一部を発表することが義務付けられます。詳しくは、センターHPをご確認ください。

### 成果報告書

学際情報学府 学際情報学専攻  
文化・人間情報学コース 博士課程  
赤池美紀

博士論文奨学助成金 (ZSP) を頂き、2017年10月3日から12月28日までの約3ヶ月間ドイツの首都ベルリンで研究を行いました。このような大変貴重な機会を頂戴できたことに、御関係者の皆様へ心から深くお礼を申し上げます。

### 研究背景

音楽を聴取するシーンにおいて、聴取者が審美的体験をするプロセスとその要素の存在を明らかにしたのがBrattico らであるが(Brattico et al, 2017 ; Brattico & Pearce, 2013)、音楽を聴取するだけでなく音楽レッスンを受ける時に生じる情報処理モデルの存在は未だ解明されていない。しかし2017年1月から3月まで、ドイツ・フランス・日本で実施されたフルートレッスンの観察調査を行なった結果、レッスン時の教授プロセスを情報処理モデルとして概念化することができることを確認した。また同時にドイツやフランスの教授者は、骨格筋の使い方や呼吸と身体の使い方など、身体活動の効率的、健康を損ねない姿勢や呼吸法、筋肉の使い方などに指導の時間を割く傾向にあることがわかった。確かに日本の音楽大学などでは、健康や医学的観点から、音楽家の身体活動について体系的に学習することができるカリキュラムを提供している大学は少ない。しかし本分野は音楽医学 (ドイツ語: Musikermmedizin、英語: Musicians' Medicine) と呼ばれており、世界には8カ国 (ドイツ、オースト

リア、スイス、フランス、オランダ、イギリス、アメリカ、ニュージーランド) に学会が存在する。特にドイツでは、学会の強力なサポートを得て、多くの音楽大学では体系的な授業科目として生理学的、医学的観点から演奏という行為を学習することができるとされている(Altenmüller et al, 2016 ; Spahn, 2017)。

### 研究目的

本研究の最終的な目的は、音楽レッスン時の教授プロセスを音楽医学の観点から情報処理モデルとして概念化し、また各プロセスに影響を与えている要素を同定していくことである。都市をベルリンに選んだ理由は、ドイツの音楽大学の中でも特にベルリンのハンスアイスラー音楽大学 (Hochschule für Musik Hanns Eisler Berlin) の中にKurt Singer研究所 (Kurt-Singer-Institut für Musikphysiologie und Musikergesundheit) が設置されており、その研究所が音楽医学に関する科目を週19コマと、他大学と比較すると豊富に提供している。よってこの音楽大学では、音楽医学の観点からレッスンを教授するという習慣が根付いているのではないかと考えたためである。なおドイツ国内の音楽大学と比較した場合、ベルリンの音楽大学がいかに豊富な科目を提供しているのかについては、別途定量的な研究を行う必要があると考えている。

### 研究方法

音楽医学の各科目がどのような教授を行っているのかを理解する必要があったため、音楽医学の授業の参与観察を行った。各科目の概要はシラバスとしてWEBに公開されているが、文言だけでは理解が不足していた科目にフォーカスして授業へ参加し、その科目がどのようなものなのかについて理解を深めた。また同時に音楽大学の授業として行っているレッスンを聴講し、教員が発言した内容の中から、



身体活動に言及した文言を記録に取り、どのような事柄について言及を行っているのかを分析した。

## 音楽医学について

ハンスアイスラー音楽大学で提供されている音楽医学に関する科目は、以下のように4つのモジュール、13の科目で構成されている

(引用元: [http://www.hfm-berlin.de/fileadmin/user\\_upload/PDF/KSI/Infobroschuere.Lehre.KSI.HfM.WS17.AS.FINAL.pdf](http://www.hfm-berlin.de/fileadmin/user_upload/PDF/KSI/Infobroschuere.Lehre.KSI.HfM.WS17.AS.FINAL.pdf)、2018年1月13日)。

- A) Musikphysiologie (音楽生理学)
  - ① Vorlesungen (講義)
  - ② Praxisseminar (演習)
- B) Körpertraining und Bewegungslehre (身体トレーニングと運動教育)
  - ① Fitness (フィットネス)
  - ② Krafttraining (筋力トレーニング)
  - ③ Physioprophylaxe (身体予防)
  - ④ Pilates (ピラティス)
  - ⑤ Rückenschule (背中への痛み予防)
  - ⑥ Schwimmen (水泳)
- C) Körperwahrnehmungsschulung (身体知覚トレーニング)
  - ① Alexandertechnik (アレキサンダー・テクニク)
  - ② Atemlehre (呼吸法)
  - ③ Feldenkrais-Methode (フェルデンクライス・メソッド)
- D) Auftrittstraining (舞台トレーニング)
  - ① Mental und Auftrittstraining (メンタル舞台トレーニング)
  - ② Entspannungstraining (リラクセーショントレーニング)

以下は参加した授業の中から一部の概要と所感である。

### 音楽生理学 (講義)：神経内科医の先生が担当

人体の筋骨格の名称・形態・機能を知り、演奏中にどのような負荷がどの部位にかかるのか、楽器別に説明を行う。手の痛みを回避するために、なぜ肘まで温めなければならないのか(腱の存在がヒント)、なぜこまめな休憩が必要なのか、その身体メカニズムを理解することがで

きる授業。

### 音楽生理学 (演習)：理学療法士 & ピラティスの先生が担当

音楽生理学の講義で学習したことを、実際に自分の体を使って身体知覚する授業。「立つ」という姿勢を取った時、重心はどこに来るのか、なぜそこでなければいけないのか。骨盤の位置、肩の筋肉がどう動くのかなどペアになって互いの体を観察したり、手のマッサージの方法、腹や腿の筋肉トレーニングの方法などについて学習したりした。

### メンタル舞台トレーニング：臨床心理士 & コーチングの先生が担当

学生の内面まで介入する授業。初回の授業は互いの悩みを語り合うところからスタート。何万回と練習しいつでも同じテンポで同じように暗譜で演奏することができるにも関わらず、人前で演奏する時、なぜ我を見失ってしまうのか。先生が目の前に立っただけで呼吸が早くなり、落ち着きがなくなってしまうのはなぜか。舞台を終えた直後の異常な興奮を和らげる方法が見つからないなど、それらの悩みに対して、自律訓練法 (Autogene training) を学ぶ。これは通称「Fünf Atmung (5呼吸)」と呼び、1・2・3で吸って、4・5で吐くというもの。詳細は割愛するが、自己暗示的な要素もあった。この呼吸を行った後では、脈拍がゆっくりとなり、短時間でリラックスする方法を身に付けることができるようになった。二回目の授業は、舞台を想定。演奏者を演じる一人の学生が入り口から入り、階段を降りて、観客 (10名ほどの学生) が一列に並ぶ前に立つ。2分間の立位を終えた後、自分の名前 & 演奏曲目をいい、お辞儀をして退場する。その間一列に座っている学生は、入場から退場までの全ての行為を観察する。その後、演奏者と観客が互いに何を感じたのかを共有しあい、それに対して先生からフィードバックを頂いた。また実際に舞台上で数分間演奏をし、その様子をビデオ撮影し、参加者全員で分析を行うことで、演奏という行為を客観視する訓練を行った。

### 呼吸法：言語聴覚士の先生が担当

様々な形態で体を動かしたり、異なる発音をし

ながら息を吸ったり吐いたりする授業。呼吸をしている時、どの筋肉がどんな風に動いているのか、筋肉を弛緩させるために、どのような動きと呼吸をしたら良いのかについて学ぶ。オーケストラの練習で長時間拘束された時にも、椅子に座りながらできる方法や、電車の中でも周囲に気づかれずに行う方法を伝授してもらう。

### 音楽レッスンについて

音楽医学の知識を演奏時にどのように応用することができるのか、音楽レッスン観察を通して考察するため、計3回のレッスンを聴講した（10月24日・フルート・男性・ハンスアイスラー音楽大学所属、11月15日・フルート・男性・ベルリン芸術大学所属、12月5日・ハープ・女性・ハンスアイスラー音楽大学所属）。学生の本番演奏の練習の場であるVortragsAbendを20回以上聴きに行き、演奏者がどのように体を使って演奏を行うのかを観察した。また同時に効果的な身体活動を行っている演奏者に声をかけ、そのような動きをどのようにして身につけたのかを後日インタビューを行った（11月16日・女性・コレペティトゥア・ベルリン芸術大学所属）。以上授業の観察、舞台の観察とインタビューを通して、演奏という行為の間、音楽医学の観点から奏者がどのような問題を抱えているのか、またもし音楽医学教育を受けていたならば、それらの問題に対し

てどのような対処が可能なのかを明らかにした。

### 残された課題

以上調査のためベルリンへ滞在した3ヶ月間は、音楽医学教育の内容について深く理解するため参与観察を行い、また音楽レッスンや演奏という行為の現場で、奏者が実際にどのような問題を抱えているのか、音楽医学教育がなぜ必要なのかについて探索を行った。本研究の結果は、「ベルリンで行われている音楽医学教育の事例研究」として現在論文執筆を行っている。残された課題は、音楽医学教育の有効性に関する調査である。教育を受ける前と後でどのような違いがあるのか、またその効果はどの程度継続可能なのかについて定量的に明らかにすることにより、音楽医学教育の重要性が明確になると考えている。また本研究の最終的な目的は、音楽レッスン時の教授プロセスを音楽医学の観点から情報処理モデルとして概念化し、また各プロセスに影響を与えている要素を同定していくことであった。この観点からも引き続き研究を行なって行きたい。

## IV TLPボン・ウィンタースクールプログラム

2018年2月21日から3月8日にかけて、東京大学教養学部前期課程の東京大学トライリンガル・プログラム（TLP）ドイツ語履修学生を対象に「TLPボン・ウィンタースクールプログラム」が実施されました。このウィンタースクールは、東京大学グローバルリーダー育成プログラムからの助成を受けて、10名の参加者を得て開催されました。参加者はボンにおいて約2週間にわたってドイツ語の集中的な訓練を受けるとともに、東京大学と全学協定を結んでいるボン大学教員による講演会やワークショップ、現地の学生たちとの交流会、博物館・美術館でのガイドツアーにも参加しました。ドイツ語のみならず英語を使用する機会も多く、トライリンガル・プログラムの名にふさわしい内容となっています。参加者に対しては、往復の航空運賃の一部と、プログラム参加費・滞在費が助成されます。最新の情報については、センターHPを随時ご確認ください。

## プログラム参加記

教養学部 理科Ⅰ類  
野崎多実子

私は昨年、1年生の時にもTLPドイツ語ボン冬季研修に参加した。昨年の経験も踏まえて、今回2年生として再びこのプログラムに参加して感じたことを述べたい。

### ドイツ語授業の感想

私は今回、Novak先生のクラスで授業を受けたが、学生が4人と少人数のクラスだったため、常に緊張感を持ち、集中することができた。さらに、テキストが指定されていなかったのも、文法事項の説明に時間を割き過ぎる、あるいは予習によって事前知識を持ち過ぎる、ということもなく、その場でドイツ語で考える訓練を行えたように感じる。また、毎回の授業で宿題が課されたことも、ドイツ語を学ぶことを研修中に常に意識することができた、という点で良かったと思う。特に印象に残ったエクササイズとしては、写真を見て状況を説明、描写するエクササイズがある。このエクササイズでは、単語力や表現力、文法力などを総合的に要求されたため、かなり苦戦したが、臨機応変にドイツ語を使う力を鍛えることができたと思う。また、昨年と同様に行われたボン中心街でのクイズラリーやインタビューは普段の大学の授業ではできない経験でありとても印象に残っている。インタビューはペアを組んで行うが、前回の研修の際はペアに頼りきりでほとんど自分からボンの市民に質問をできなかったのに対して、今回は積極的に質問をして会話につなげ、さらにインタビューの結果をプレゼンとして分かりやすく整理、発表することができ、自分の成長を感じた。

### 午後・週末プログラムの感想

交流会ではドイツの学生の高い日本語、英語力に圧倒されただけでなく、日本人学生の英語の能

力の高さにも驚かされた。また、母語以外の英語などの言語を完璧に近いレベルまでマスターした上で、さらに日本語、韓国語など別の言語にも向上心を持って取り組んでいくというドイツの学生の姿勢は見習わなければならないと思った。個人的には、グループワークでは発言し、積極的に議論を進められたが、全体のディスカッションで発言できなかったことは反省点である。

講演会は、文系、理系それぞれ2つのプログラムが用意されており、文系の講演だけだった昨年に比べて、より興味を持って聞くことができた。新政権の組閣問題のような最新の政治情勢を含めた講演や、ボン大学のロボットの映像をふんだんに用いた講演などが特に印象に残っている。講演後の質疑応答で質問をすることができたのも、ただ受身で講演を聞くだけだった前回からの成長だと思う。

午後・週末の小旅行では、ブリュールやケルン、アーヘンなどの都市を昨年と同様に訪れたが、多くの美術館やチョコレート工場など昨年行くことのできなかった場所で新しい経験をすることができ、有意義だった。また、初めて訪れたトリーアでローマの遺跡を見ることができたのも、ケルンのローマ時代のモザイク画と相まって、ドイツの歴史を感じることもできる新鮮な体験であった。

### 日常生活・その他の感想

学年が違うこともあり、1年生と打ち解けられるか不安もあったが、様々なプログラムや授業を通じて最終的には仲良くなることができ、嬉しかった。また、とにかく量が多い食事、盛り付けの際に加減をしてもらうなどの工夫によって食べ過ぎることなく適度な量を食えることができ、満足している。ただ、ドイツでも異例の3月の寒波に遭遇してしまい、街中での授業などがかなり寒かったこと、雪や雨のために足元がかなり悪かったことは想定外であった。そのような気候の中で、大きく体調を崩すことなく研修を終えることができた。

昨年に比べて生活面で特に改善したと思うのは、Wi-Fiルーターが数人に一台の割合で支給され

ていたことである。ほとんどの人がWi-Fiルーターを持っておらず、午後のプログラムなどで学生や先生と連絡がとりにくかった昨年と比較して、より安心して街中で行動することができ、小さなグループに分かれて、それぞれが興味を持った場所を訪れることが可能になったと思う。

生活全般において、二回目の研修ということで観光気分が良い意味で抜け、ドイツ語の学習やドイツ文化に触れるなど研修の本来の趣旨に近い姿勢で研修を行うことができた2週間だったと思う。

### 研修の良かった点

今回の研修は、TLPを修了し、2月に修了証を受け取った上での参加であったため、TLPでのドイツ語学習の集大成として良い区切りとなったように思う。また、2Aセメスターにドイツ語の授業が全くなかったことによりかなり忘れていたドイツ語にも、ドイツに行ってドイツ語の中で生活することでリスニングやスピーキングの面でかなりの回復、向上があったように感じる。カウフマン先生を始めとするドイツ人の先生方のお話は、昨年の冬季研修時には、正確には理解できず、ただ聞いて頷くだけだったが、今回はかなり理解し、会話につなげることができるようになっていたことは驚きである。

研修内容も2回目だからつまらないと感じるものはほとんどなく、昨年やり残したことや、一年間で新たに身につけたことなどをもとに新しい体験が数多くできたと感じている。

また、才能と意欲にあふれた一年生と共に学ぶことによって、ドイツ語のみならず、英語や自分の専門分野でも、妥協せず常に積極的に取り組んでいく姿勢の重要性を痛感することができたと思う。

### 研修の改善すべき点

研修の開始時に週末プログラムで訪れる都市が確定していなかったことで、研修中に週末プログラムについての予定の変更や学生間の議論が行われた。学生が主体的に議論、発言をしてプログラムに参加するのは素晴らしいことだが、研修前に行うのがより良いのではないだろうか。行動範囲

や場所についてあらかじめ学生間や学生と教員の間である程度の共通認識を持ち、できればドイツへの出発前に確定させることが望ましいのではないかと考える。そうすることで、訪れる場所についてあらかじめ調べることも可能になり、より理解が深まると思う。

また、ペアを組んでの街中での活動があることも考えると、Wi-Fiルーターは数人で一台よりも、二人に一台あるのがなお良いではないかと思う。

### その他

今回の研修を通じて、二回ドイツ研修に参加すること、及び2年生が研修に参加することの意義を強く感じた。二回目の研修は、1年生で参加した時と同様に大きく、また違った収穫を得られるものであり、一年間で自分にドイツ語がどのくらい身についたのかを実感するとともに、今後も様々な形でドイツ語やドイツ文化に触れていきたいと感じさせるものだったと思う。

個人的には、TLPの授業で実際のドイツ語力を本格的に身につけることができるようになるのは、1年生の必修ドイツ語とTLPの授業でドイツ語の基本を学び終わった後の2Sセメスターであると思う。この時期を挟んで2回研修に行くことは、1年生は2SセメスターでもTLPでドイツ語を学び続けることへのモチベーションを、2年生は2Sセメスターでの学習成果の実感、さらにTLP修了後のドイツ語学習の意欲を得られるという点から、とても意味のあることであると感じる。二回のドイツ研修への参加を通じて、1年生の時に一回、さらにTLPプログラム修了後の2年生の夏もしくは冬にもう一度研修に行くことができるという制度が一番望ましいのではないかと感じている。

最後に、平松先生、カウフマン先生をはじめとする引率の先生方、二回目のドイツ研修への参加を可能にしてくださったドイツ語部会の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



## プログラム参加記

教養学部 文科三類  
西野桃子

TLPドイツ語ボン冬季研修に参加した感想を以下に述べる。

午前中の3時間ほどのドイツ人教師によるドイツ語の授業は非常に有意義なものだった。ドイツ語を中心に、必要に応じて英語で説明がされるという授業形態や、授業で取り扱われる内容、教材のレベルは正直駒場で受けているTLPの授業と大差はないと感じた。使用された教材に至ってはむしろ駒場で使われている教材よりも簡単だった。しかし、この研修で初めてやったこともいくつかあった。

一つ目は、電子辞書やスマホで言葉の意味を調べることが禁止する時間が設けられたことだ。これは常にそうだったわけではなく、30分程のみ行った試みであった。その30分間は、わからない言葉があっても辞書を使わずに教師に聞き、教師のドイツ語の説明でその言葉の意味の理解を試みた。辞書を使わなかったので教師やクラスメートの言っていることを集中して聞くことができ、駒場での授業のように単語を調べているうちに授業が進み、途中からついていけなくなるということがなかった。また、ドイツ語でドイツ語の単語の説明をされても理解するのは難しく、理解するには能動的に説明を聞く必要があったため、辞書で調べるより単語の意味が記憶に定着しやすかった。駒場の授業でも辞書の使用頻度を減らし、単語の意味は教師に質問しようと思う。

二つ目は教材としてドイツ語のドラマが用いられたことだ。駒場ではリスニングの教材として主にCDが用いられている。CDでは音声しか再生されないがこれに対してドラマは、音声だけでなく登場人物のジェスチャーなどからも会話の内容が推測できるなど、より現実に近い形でリスニングの練習ができた。自宅で学習する際も使いたいと思った。

三つめはボン市街に出て現地の住人にドイツ語でインタビューしたことだ。これをするまで私は教室の中でしかドイツ語を使ったことがなく、自分のドイツ語がどれほど通用するかわからなかった。このインタビューのおかげでドイツ語を母語とする人たちと会話をすることができ、自分のスピーキング力の低さを痛感した。逆に相手の言っていることはほぼ理解することができ、リスニング力は高いことが分かり自信になった。自分の課題がはっきりしたので駒場ではそれらを少しずつ解決していきたい。

また、駒場の授業ではリスニングのアクティビティーをたくさんやるのだが、研修中はリスニングはドラマを三回ほど見ただけで、あとはスピーキングをメインに授業が行われた。クラスが6人だったこともあり話す機会は必然的に多くなったのだが、今まで身に着けた文法の知識をアウトプットすることによってドイツ語の理解が深まったのを感じた。

平日の午後にはワークショップが開かれることが多く、大学の教授のプレゼンを聞く、テレビ、ラジオの放送局を見学するなどした。これらを通じて私は自分の興味の幅が広がるのを感じた。特に印象に残っているのはアフリカにおける食糧問題についてのプレゼンだ。灌漑設備と肥料の不足がいかにアフリカの農業に打撃を与えているか、穀物メジャーが小さな農家達に与えている影響、人口の急増による食糧不足など様々な問題が取り扱われた。このプレゼンを聞いて私は食糧問題の深刻さを改めて認識し、その結果今農学部への進学を本格的に検討している。週末はボン付近の観光地を観光した。ケルン、アーヘン、トリアーに行くことができたのだが、どの町にも有名な聖堂があり、キリスト教的世界観を強く感じることで新鮮だった。特に印象に残っている町はトリアーだ。トリアーは、日本では有名ではないが、ドイツで一番古い町で、古代ローマの遺跡をたくさん見ることができた。その一つである、浴場の遺跡を見ている際にふと古代ローマの文化が何故非常に栄えていたにもかかわらず滅びてしまったのか疑問に感じた。この研修ではヨーロッパの古い建築をたくさん見たのだが、受験生の時に勉強した、ロマネスク様式、ゴシック様式の特

徴を実際に見ることができて非常に興味深かった。多くの建物が何度か改修されたものだったが、それらは様式が混在しており、その建物の歴史を知りたいと感じた。とはいえ私は建築や絵画について詳しいわけではないので教会の中の絵画などは分からないものが多く残念だった。今度ヨーロッパに行くのは建築、絵画を一通り勉強し、聖書を読んでからにしたい。

電車の乗り換えで時間が余った際に駅の本屋に寄ったのだが、どの駅の本屋でも日本の漫画のドイツ語訳が売っていて驚くと同時に、いわゆる「クールジャパン」の影響力の強さを実感した。この研修中にボンの学生と交流する機会があったのだが、その一人がある有名な少年漫画を読んだことがあるか私に尋ねてきたのだがその漫画を読んだことがない私は彼女の話についていくことができないということがあった。漫画やアニメが日本の文化として外国に浸透している今、日本人として、有名な漫画やアニメに関する知識は持っておきたいと思った。

前述のとおり、研修中にボンの学生と交流する機会があった。ボンの学生とともにコミュニケーションについて考えるというプログラムだったのだがその際にドイツの学生たちが思ったことを躊躇うことなく口に出しているのを見て、自分もそのような積極性を身に着けたいと感じ、さらに、国際社会で生きていくにはそのような積極性が必要なのだと改めて実感した。交流したボンの学生の中にはドイツ国籍を持っておらず、大学のためにドイツに住んでいるという人もいた。彼は3年半しかドイツ語を習っていないにもかかわらずとても流ちょうに話しており、話せるようになるのが非常に困難と言われているドイツ語の学習を続ける励みになった。

本研修のよかったところは主に二つある。一つ目は、当然のことだが、ドイツ語に触れる機会が非常に多かったことである。日本では教室の中で週三回ほどしかドイツ語に触れられなかったのだが、研修中は、朝から晩までドイツ語と触れ合っていた。電車のアナウンスや標識などの日常生活にドイツ語が入り込んでおり、それらを毎日見聞きしていたので単語や言い回しをたくさん吸収することができた。また、ドイツ人の多くは英語も話することができるのだが中にはそうでない人もおり、そのような人と話

すときはドイツ語でどうにかするしかなく、文法について考える余裕もないまま自分のつたないドイツ語で相手にメッセージを伝えるしかなかった。非常に難しく緊張したが、ドイツ語を使わなければいけない状況に追い込まれた時の方がドイツ語が伸びたと断言できる。日本では、文法について気にするあまり発言できていなかったのだが、この研修で、語学はアウトプットして学ぶものだということを感じたので、それを実践していきたい。

この研修において自分のドイツ語の力、そしてドイツ文化に対する理解は確実に向上したと感じており全体的に非常に満足した。しかし、改善できる点もいくつか見受けられた。一つ目は午前中の授業のレベルだ。前述のとおり授業で取り扱った教材の難易度は駒場で使われている教材よりも易しかった。駒場で使われている教材が難しすぎるというものもあるが、もう少し難易度が高くてもよかった気がする。ちなみに教師は、夏に研修に来た生徒たちから難しすぎるとの声が多かったので難易度を下げたと言っていた。もう一つは、ボンの学生と交流する機会の少なさだ。ボンにいた間、一緒にプログラムに参加した学生たちとの仲は深めることができたが、せっかくボンに行ったので、できることなら多くのドイツの学生と交流したかった。

ドイツ語は格変化や複数形が複雑で挫折しそうになったこともあるが、この研修で自分のドイツ語の実力に自信を持つことができた。この研修で学んだことは確実に今後の学びにつなげていきたい。

## V

## 2017年度DESK活動記録一覧

|                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1月11日             | <p>ティモシー・スナイダー教授講演会 Bloodlands: Europe Between Hitler and Stalin<br/>「ブラッドランドーヒトラーとスターリン 大虐殺の真実ー」（於：東京大学駒場キャンパス）<br/>Professor Timothy Snyder（イェール大学歴史学部教授）<br/>主催：科研基盤研究（B）「異文化交流と近代外交の変容」（代表者：聖心女子大学桑名映子）<br/>科研基盤研究（B）「ソ連・東欧におけるホロコーストの比較研究」（代表者：東京医科歯科大学高尾千津子）<br/>共催：東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター（DESK）</p> |
| 1月17日             | <p>Prof. Dr. Dorothee de Nève DESK公開講演会「Social Networks and Politics in Germany - Participatory Potentials and Chances for Interaction」（於：東京大学駒場キャンパス）<br/>Prof. Dr. Dorothee de Nève（ドイツ・ギーセン大学政治学科教授）</p>                                                                                             |
| 5月29日             | <p>Dr. Andrea A. Sinn DESK公開講演会「Der Anfang nach dem Ende: Vom jüdischen (Über-)Leben im Deutschland nach dem Holocaust」（於：東京大学駒場キャンパス）<br/>Dr. Andrea A. Sinn（アメリカ・エロン大学歴史学部助教授）</p>                                                                                                                    |
| 5月30日             | <p>Dr. Andrea A. Sinn DESK公開ワークショップ「Nach dem Holocaust: Jüdische Geschichte und deutsche Erinnerungskultur nach 1945」（於：東京大学駒場キャンパス）<br/>Dr. Andrea A. Sinn（アメリカ・エロン大学歴史学部助教授）</p>                                                                                                                      |
| 10月18日            | <p>Dr. David Johst DESK公開ワークショップ「Fritz Bauer und die westdeutsche Vergangenheitspolitik」（於：東京大学駒場キャンパス）<br/>Dr. David Johst（ドイツ フリッツ・バウアー研究所 研究員）</p>                                                                                                                                                   |
| 10月20日～<br>10月21日 | <p>第2回東アジアDAADセンター会議「Modernisierung in Europa und Ostasien: Die Rolle Deutschlands bei der Konstitution von moderner Wissenschafts- und Bildungskultur in Japan, Korea, China」（於：東京大学駒場キャンパス）</p>                                                                                                       |
| 10月25日            | <p>Dr. Claire Demesmay DESK公開講演会「Deutschland als Einwanderungsland- Integrationspolitik und Identitätsdebatte」（於：東京大学駒場キャンパス）<br/>Dr. Claire Demesmay（ドイツ外交政策協会 主任研究員）</p>                                                                                                                              |



Johst氏ワークショップ



第2回東アジアDAADセンター会議



Demesmay氏講演会

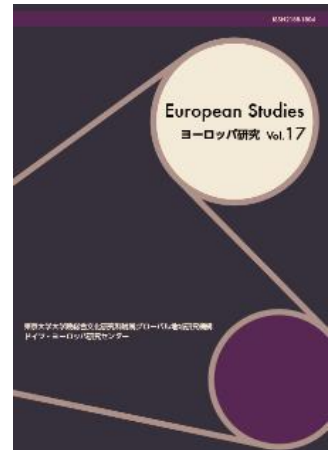
## VI

## 関連出版物の紹介

## 『ヨーロッパ研究』第17号

ドイツ・ヨーロッパ研究センターでは、内外のドイツ・ヨーロッパ研究者の寄稿による最先端の研究の紹介の場として、また、ドイツ・ヨーロッパ研究を志す若手研究者の研究成果の発表の場として、『ヨーロッパ研究 (European Studies) 』(電子ジャーナル)を発行しています。DESKホームページよりダウンロードが可能です。

[http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/books\\_bk\\_es.html](http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/books_bk_es.html)



## 目次:

## I 論文

第二次世界大戦後の人口移動 連合国の構想にみるヨーロッパとアジアの連関  
(川喜田敦子)

社会主義ドイツ学生同盟 (SDS) の対米認識の変容 —1960 年代の西ベルリンを中心に—  
(川崎聡史)

Eine Skizze des Streites um die Auslegung der »Respublica Hebraeorum« in der Frühneuzeitlichen reformierten Kirche  
(Kentaro Inagaki)

最新の情報・イベントについては、  
ホームページもご覧下さい

<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>

## DESK事務室

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部  
9号館3階313号室

Tel/Fax : 03-5454-6112

E-mail: [desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp)